

白い子犬と赤トンボ

富田武彦

病室の窓に夕陽が射し込み、ベッドの白いシーツを赤く染めるとき、いつも不思議なことが起きた。

痩せ衰えてベッドに横たわる私の体に、力がみなぎってきて立ち上がることができなのだ。そして、窓を開ける。

目の前には懐かしい風景が広がっていた。空には赤い雲がプカプカ浮かんでいて、校舎の白い壁も、赤に染まっている。校庭には赤トンボの群れが舞っていて、それを追って幼友達や、妹の優子が駆け回っている。なぜか優子は左足を不自然に引きずりながら駆けている。その後ろを白い子犬が嬉しそうに跳ねながら追っかけている。

（そうだ、あれはシロだ）

「おーい。シロ、優子」

窓から大声で呼びかけるが、優子もシロも気づいてくれない。

そこで突然、優子とシロが消えてしま

い、校庭に積もった雪の中に私が立っている。周りには誰もいない。赤い夕陽の風景は真つ白な雪景色に変わっている。

「優子、ゴメン。シロ、許してくれ」

なぜか、私は涙を流しながら、人いない校庭にうずくまる。

いつもそこで目が覚めるのだった。

目の前にあるのは、夕陽でも友だちの姿でもなく、薄汚れた病室の白い天井であつた。

優子とシロに謝っていたのはなぜだろう……？雪の校庭にうずくまって、どうして私は涙を流していたのだろう……？どうしても、その理由は解らなかつた。

私は死を迎えようとしていた。五十五歳は若すぎると泣いてくれる人もいたが、私はこれでいい。もう十分だと思う。

五年前、舌の付け根に痛みを感じた。

近所の医院で口内炎だと言われ、塗り薬

を貰ったが、一向に良くならず、痛みは増すばかりだった。唾を飲み込むとズキンと痛みが走るようになった。

大きな病院で診てもらおうと、

「舌痛です」

と、言われた。

舌の根をえぐり取り、腕の血管と肉と皮膚を移植した。腕の傷は目立たないようにと、太ももの皮膚を剥ぎ取り移植した。そして、最後に太ももの傷の治療には、人工の皮膚を用いた。

十二時間にも及ぶ手術だった。手術室から集中治療室に移された私は、その後、三日間も意識が有ったり、無かつたり夢の中をさまよっていた。夢で見ているのはいつも赤い夕陽の校庭で優子とシロが駆け回っている姿と、白い雪の上で涙を流している自分の姿だった。

経過は順調で、一か月も経つと退院となり、さらに一か月後には仕事に復帰することができた。

退院してからも、半年ごとにCT検査を受けた。

「もう、大丈夫です」

三年目の検査のときに、医者がかう言った。

食道に悪性の腫瘍が見つかったのは、その半年後のことだった。

腹を切り開き、胃の半分を取って、丸めて管を作り、食道の代わりとする。次に脇腹を切つて肋骨を外し、胃で作つた管と腫瘍のはびこつた食道を入れ替える。

私はよく耐えた。一時はよくなり退院したのだが、半分になつた胃は、食物を受け付けず、みるみる痩せていき、体力も衰えていった。

入退院を繰り返すようになり、やがて、ベッドを出ることもできなくなつた。

平成元年、三十五歳の私は、ある大手電機メーカーの半導体工場の建設工事にたずさわっていた。

森の木を伐採して造成した広大な敷地に、工場は建設中だった。

この辺りには原野も広がつていて、草や低木がうっそうと茂つていた。自然にできた小さな道やせせらぎには野生の小动物が多く生息していた。

「何だ、あの赤い物は！」

建設現場で働く作業員の一人が指を指した。

それは草むらの中に横たわつていた。イタチかカワウソか、小動物の死体だった。胴体のあたりを食いちぎられていて、赤い肉片が周囲にも散らばつていた。「野犬に襲われたんだろうな」

誰かが言つた。

そういえば、最近、この辺りで野良犬の群れを見かけることがよくあつた。五六匹の家族と思われた。犬たちは、原野に生息するイタチや野鼠などを捕獲して食料としていると思われた。

大好きな作業員が、餌付けをしようと、餌を手に、犬たちに近づいて行つたが、逃げて行き、けつして人間との距離を縮めようとはしなかつた。それでも、建設現場のゴミコンテナに捨てられた弁当の残飯は、野良犬には恰好の食糧で、人の目を盗んではゴミをあさりに来ていたようであつた。

一匹の白い子犬が、群れを離れて現場事務所の裏に現れるようになった。

食べ物を持ってやると喜んで食べた。

それでも、人が近づいて行くとパツと逃げてしまつて、あいかわらず、人との距離は縮まらなかつた。

この子犬にはおかしい癖があつた。軍手を丸めて遠くに投げてやると、追いかけて行つて、ずたずたになるまで引きちぎつて遊んでいるのだ。それはまるで、獲物を捕らえて肉を食べるための練習をしているようにも見えた。

頻繁に現場事務所付近に子犬が現れるようになったある日、私はゴミコンテナに不要な事務書類を捨てていた。風が吹いてきて手にしていた書類が数枚バラバラと風に舞つた。足元に落ちた紙片を拾おうとかがんだとき、コンテナの影で白い何かが動く気配がした。あの白い子犬だつた。

「シロおいで」

無意識のうちに、私は子犬をシロと呼んでいた。その名前に違和感はなかつた。そのとき、私の頭の中で、はじけるものがあつた。ほんやりとはあるが、忘れていた記憶の一部がよみがえつてきたのだ。

(シロは妹が可愛がつていた子犬の名前だ。でも、どうしてシロのことを忘れてしまつていたのであろう……?) そして、込みあげてくる得体の知れないこの罪悪感は何

だろう」

解らなかった。

「シロ、おいで」

その場にしゃがみ、再び声をかけ手招いたが、子犬は、少しずつ後ずさりをして、ひるがえると逃げて行った。

糸口が見つかると、忘れていた記憶が徐々に戻ってきた。

記憶の中にひとつの風景があった。それは、寒々として一面真っ白に雪の積もった川原だった。

嫌な記憶だった。

私は魚を釣っていた。寒いからか魚はあまり獲れなくて、私は不機嫌でイライラとしていた。

遠くで犬の鳴き声がしていた。その声が大んだんと大きくなってきて、私に近づいて来た。しばらくして、雪を踏み込むググツという足音がした。振り向くと優子が後ろに立っていた。

「お兄ちゃん、お母さんがご飯だから、早く帰って来いって」

「馬鹿、静かに歩け。魚が寄ってこなくなるだろう」

不機嫌だった私が叱ると、優子は、

「うん」

とか細い声で言った。

シロが、釣った魚を入れたボックスに鼻の頭を押し付け、クンクンと匂いを嗅いでいる。そして、蓋の上に前足をかけた。ボックスははずみで蓋が開き、横に倒れて少ない獲物が雪の上に飛び出して、ピチピチと跳ねた。

「馬鹿、なんてことするー」

私は立ち上がると、シロの横腹を蹴り上げた。小さなシロはキャンと鳴き逃げようとしたが、方向を間違ったのか滑るように川べりを転がっていつて川の中に落ちた。

記憶はそこで再び途絶えた。その先のことがどうしても思い出せなかった。

九月のある日曜日、その日は朝から雨が降り続いていた。単身赴任用に借りたマンションの一室で、私は暇をもてあましていた。

電話が鳴った。

「地下室に雨が流れ込んでいると連絡があった。設置した機械が水没する恐れがある。直ぐ行って対処してほしい」

電話は所長からのもので、現場に一番近いところに部屋を借りている私にかかってきたのだった。

低気圧が発達したとかで、前夜から雨足は強まっていたが、建物の中にまで流れ込むとは誰も考えていなかったのだ。

私が駆けつけたときは手遅れで、八割ほど完成していた地下の機械室は、泥水の中に沈んでいた。手の施しようはなかった。

あきらめて、土砂降りの雨の中を引き上げようとしたとき、足元に何かが絡んできた。みると泥だらけの軍手だった。

（そういえば、あの犬たちは大丈夫なんだろうか。雨をしのげる棲家はあるのだろうか）

気にはなつたが、それ以上のことは考えなかった。

翌日から復旧作業が始まった。地下室の泥水を汲み出すのに三日もかかった。

水のひいた排水溝の金網に、白い何かが引っかかっていた。よく見るとあの子犬だった。子犬の周りには、泥に汚れてずたずたに引き裂かれた軍手が、いくつも落ちていた。

「どこか穴を掘って葬ってやろう」

私が言うよ、

「建物周辺の土地は、駐車場になるから、整地のため掘り返されてしまふ。そんなところに葬ってやるのは可愛そうだ」

と、反対意見がでて、子犬は産廃業者に引き取ってもらうことになった。

泥まみれの死体を水で洗ってやった。毛にからみついた枯草や小枝は歯ブラシで丁寧に取り除いた。きれいになった冷たい体に、折からの朝日が反射して神々しく光っていた。

（水に流されて行ったシロも誰かに体を洗ってもらったのだろうか……）

川に流されていったシロのことが、脳裏をよぎった。

最後にタオルで体を拭いてやった。涙が流れた。

そして、遺体は新品の土嚢袋に詰められた。

「あの世で、遊びな」

と、作業員の一人が軍手を丸めて、袋の中に入れた。その場にいた全員が自分の軍手を脱ぎ、丸めて同じように袋に入れた。

その後、野良犬たちを見ることは無くなった。みんな水害で死んでしまったの

か、住めなくなったので、どこかに移って行ったのかはわからなかった。

医師の献身的な治療のおかげで、死に面していた私は、奇跡的に回復し、六十歳の今も生き長らえている。

昨日、優子から電話があった。久しぶりに会いたいという。優子はマレーシアで娘夫婦と孫に囲まれて暮らしている。

孫の進学について相談するために、日本に戻ってきていると言った。

暑かった夏が去り、爽やかな風が廊下のカーテンをゆらしている。縁側で風をうけ、うつらうつらとしていると、優子が孫をつれてやってきた。

現地での生活や、孫の教育のことなど、一通りの雑談を交わした後、私は気になっていることを訊いた。

「あのとき、川に落ちたシロはその後どうなったんだ？ 死んでしまったのか……」

「覚えてないの？」

唐突にこんな質問をされ、少し困惑してみだったが、優子はゆっくりと話し始めた。

「あのとき、シロを追って私も川に落ちたの。シロは自力で泳いで岸にたどり着

いたのだけど、泳げない私は溺れて流されたのよ」

「覚えてないんだ。どうしても思い出せない」

その後のおぼろげな記憶を、いくらたどってもシロのことは思い出せなかった。

「シロは死んでしまったのか……、俺が殺してしまったのか？」

「そうじゃないの」

優子は首を横にふった。

「兄さんが覚えてないのには、訳があるのよ。聞いて。兄さんは私を助けようとして川に飛び込んだのよ」

まったく記憶になかった。

「川島病院って知ってる？」

「精神科の病院だろ。今もあるよな」

「兄さんは、そこで記憶を消すために治療を受けていたのよ」

優子の口を聞いてででくる言葉に、私は驚くばかりだった。

優子を助けようとして川に飛び込んだ私は、身を切るような冷たさに気を失ってしまったのだった。

幸い、通りがかった人に助けられて、優子も私も助かったのだが、それがもと

で優子は重い肺炎にかかってしまった。一時は生死の境をさまようほどに重症化したのだという。退院したときには、優子の左足は動かなくなっていた。リハビリを受けて、どうにか左足は動くようにはなったのだが、引きずるようにしか歩くことはできなくなってしまうていた。

そのことを、苦にして私はノイローゼになり食事ができなくなつた。日に日に痩せ衰えていく私を心配した父は、近所の医院に何度も連れて行つた。そこで、医者に精神科で治療を受けることを勧められた。

私は、町にある川島精神病院に入院し、催眠療法を受けて、私を苦しめている嫌な記憶を消し去ることができたのだつた。「シロはどうなつた？」

「シロはね。兄さんの記憶が戻るといけないからつて、お父さんが知り合いの人にあげたの。私はずいぶんイヤダイヤダと抵抗したらしいけどね」

「優子はその後シロには会わなかつたのか？」

優子は答えなかつた。ただ首を横にむけて笑つた。

幼い優子は、シロのことはもう忘れなさいと、両親に諭されて泣く泣くあきらめなければならなかつたのだらうと思つ。優子は健気に両親の言いつけを守つて、私には黙つていたのだらう。罪の意識を感じずにはいられなかつた。

(ゴメンな優子)

私は心の中でそうつぶやいた。口に出して謝るのは照れくさかつたからである。そう長くは日本に滞在できないという優子に、

「久しぶりに会えたんだから、飯でも食つていけよ」

私が言うと、優子が空を指さして言った。「あれ、赤トンボだわ」

いつの間にか夕暮れがせまつていて、空には赤い雲がプカプカと浮かんでた。

そして空の下、赤トンボの群れが舞つていた。

それはあのとき、病床でいつも見ていた風景と重なつて見えた。

(終)